

BOOK REVIEW

インターネットを生命化する プロクロニズムの思想と実践

ドミニク・チェン 著

青土社 ISBN 978-4791767168 2013年発行

評者：金谷一朗（大阪大学）

ドミニク・チェンが本を執筆した。「インターネットを生命化するプロクロニズムの思想と実践」である。タイトルが長い。表紙にはさらに「自由な表現プロセスのコミュニティを作動させるソフトウェアはどのようにデザインされるのか?」「成長する生命は全て、自らの生態的プロセスを自身の身体に刻印し、それを外科医に表出させながら存在している」「インターネットのコミュニケーションに不足しているのは水平の交通ではなく、個々の表現とその担い手の深度の顕在化であり、それは結果だけではなくプロセスにも注視することによって実現する」と文章のオンパレードである。

表紙で圧倒されてはいけぬ。目次を見てみよう。

「第I部 表現のプロクロニズムと相同」には始まり「第II部 コミュニティのプロクロニズムと相同」と続き「展望表現の生命的な継承と統治に向けて」で締めくくられる。各章のタイトルはオンライン書店などでご自身で確認していただきたいが、いわゆる理工系ワードに汚染された頭脳にはこれでもかと脳みそを揺さぶる単語が並んでいる。

そこで、ここでは書評などと大逸れたことを言わず、本書を手にするきっかけを読者に提供したいと思う。本書のはじめには、「創造的な表現の来歴はいかにしてかたちづくられ、それは他者とのように関係しているのか」をテーマとした書籍であることが示される。非常に端折った言い方をすると、創造力はどこからやってきて、どのように理解され、どのようにすれば強化できるのかといったことだろう。

本書の第I部の冒頭にはタイトルにも現れる「プロクロニズム」の説明がまずある。本書のプロクロニズムはグレゴリー・ベイトソンの定義「生命の来歴がその形態に刻み込まれること」を踏襲したものだ。生物の形態を観察し、その発生のプロセスを推測することによって、それがまさに生物である（他の生物とホモロガス*である）ことを理解するプロセスにおいて、「発生のプロセス」の法則を「プロクロニズム」と呼ぶ。読者にとっておそらくはより馴染みのある情報科学の用語で置き換えると、生物を「文」、プロクロニズムを生成文法における「規則」と見なせるかもしれない。この文とあの文が同じ言語で書かれていることを知るために、文から文法

を推測するのと同じことだ。

ドミニク・チェンはこの「プロクロニズム」あるいはその背後にある「ホモロジー」（相同性）こそが創造性の理解の鍵と看破し、古今東西に新たな光を投げかけながら旅をする。彼は人間の表現活動がオートポイエティック**であることに立脚し、それ故表現活動と生命がホモロガスであることを主張する。

本書の第II部ではさらに、人間と人間のつながりがまたオートポイエティックであることを主張し、そこに表現活動の理解と同じ構造を見出す。情報科学の言葉で言えば、 $(\lambda x. x)x$ を個人の創造活動とすると、集団の創造活動は $((\lambda x. x)(\lambda x. x))x$ のようなものだ、というところだろう。いや、却ってわかりにくい。

しかし、この喩えを続けるならば、本書は、表現活動における不動点コンビネータを求める旅だとも言える。

特に第II部は、ドミニク・チェン自身が実践しているコミュニティベースの創造活動に焦点をあて、それを詳細に分析しているのに対し、第I部はメタな議論を中心に行われているのに対し、第II部は具体的に書かれており、また独立して読めるように工夫もされているので、前半を飛ばして読み始めることも出来るようだ。

本書のもうひとつ注目すべき点は、本書の最後に掲げられた「註」である。これがまた長くて、良い。いわゆる参考文献リストだが、創造性の理論化を試みるものならば誰にとっても第一級の文献リストであるだけでなく、重要な箇所には細かい注意書きまで添えられている。表紙からして圧倒的なボリュームであったが、この参考文献リストだけでも本書を購入する動機に十分なり得る。

ドミニク・チェンは思想だけでなく実践の人でもある。彼の業績は我が国におけるクリエイティブ・ commonsの普及のみにとどまらず、自身でも TypeTrace を始めとする作品を世に送り出している。それ故、本書タイトルの「思想と実践」は真正であり、上辺の議論とは一線を画す迫力がある。

* 構造的に相同の意。幾何学における「ホモロガス」とは異なる。

** 境界を自己決定していること。

